The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	クローデルの百扇帖について
Author(s)	中山, 篤子
Citation	Gallia. 1983, 21-22, p. 246-256
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9700
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

クローデルの百扇帖について

中　山　篤　子

1 牡丹　真の名申さば崩るわれ牡丹
〈君呼びて花薔薇とやわれ牡丹　　まこと名告ぐればはたと崩るる〉[1]
2 色匂　色香ならぬ色香しのばむ白牡丹[2]
3 藤蛇　藤房や蔓の蛇を隠し得ず
4 藤柏　枯柏や命をからむ藤の花
〈命なる藤の海蛇は千手もつ　　柏の枯木にからまりて謝す〉
5 地蔵　日盛りや眼閉じます地蔵尊[3]
6 石祈　貧し祈地蔵頭上の石に以る
7 雨織　春光（陽光）に糸雨重ね織りなさむ　　手に持つ杖はそれ魔法の杼[4]
8 月蛙　天に跳ぶ池の蛙を見るや月　　笑ひの涙ぬぐふ絹雲[5]
9 石盲　地蔵尊頭上に高し祈り石　　頂上積むは盲人ならぬを
〈盲ならめ地蔵頂上石積む人〉
10夏夜　頬寄せばなほ炎暑あり夜地蔵
11熱仏　炎昼を身にとどめます地蔵尊
12聞感　耳寄せよ地蔵の胸に熱き慈悲
13葡萄　藤ならず葡萄の実なり神縛す[6]
14真紅　牡丹の朱人の思ひにまさりたり[7]
15酒雨　ぼうたんを酔はせし酒や昨夜の雨
16影月　月の出や手影ながむる床の中[22]
17陰墨　月光や我が影墨に非ざるに
18長谷　白牡丹底に秘めたる紅ほのか　　長谷に遠来誘ふ色かな
19血魂　肉に血や魂に思ひや赤さ滲む[8]
20花脆　脆きゆえ永遠を語りぬ牡丹花
21色息　色ならず息吹きならむや牡丹花
22瞑目　瞑目のうちに聞くべき香かな
〈瞑目のうちに聞くべし牡丹の香〉
23吾在　瞑目す我こゝなりと牡丹花
24旅人　旅人よ憂さ癒しめよこの香もて

〈旅人の憂さ癒しめむ牡丹の香〉

25華悦　ぼうたんや快楽越えたる相あり

26花消　眼を開くやかぎ尽されて牡丹消ゆ

27扇息　詩句消えて風のみとなりし扇かな

28朱橋　我越えぬ戻りゆるさぬ珊瑚橋[9]

29花酒　魂酔はす酒の如くに緋の牡丹

30紅白　血の赤きごとくに牡丹白かりき

31雪氈　雪原になほ降り敷くや雪の氈

32滝笛　滝渡る虹の精霊笛吹きぬ

33笙銀　銀笛の音と溶け合ひぬ玻璃の笛

34金鈴　黄金の音緋の赤さより赤かりき

35壠雪　草食みつ眼に雪解山午後の道[10]

36春信　口に酸き笙の音耳に春とどむ　　何ゆえ君は秋を語るや

〈春日の笙耳にあり早や秋ぞ〉[11]

37交錯　此行を辿りつ眼他行追ふ[12]

38山雷　黒ずめる尾根影止まぬ雷暗し[13]

39兎塚　夜明け前神棚の兎神香を焚く

40詩煙　わが詩句も香の如くや灰煙

41香炉　香はただ煙を残し香を残す

42新墓　林中の墓わびしきや盆灯籠[14]

43人留　美し地よ日がな佇みあらまほし

44石仏　地蔵さま頭上二石に動き得ず

45盲闇　盲目の闇にも夜や眠り恋ふ

46紙鳶　若き母凧上ぐ足も軽やかに　　背の子口開け見守りてあり

47刺匂　身を守る薔薇の香や刺ならず[15]

48猫魚　金魚鉢猫殿側に蹲る　　伏目に“魚は嫌いに候”

〈うそぶきつ猫蹲る金魚鉢〉

49児跪　腕の子の重みや跪坐の我立てず

〈腕の子の重みに立てず夏座敷〉

50櫛喞　流し眼や髪後手に櫛くはふ

51敬子　息子殿我れ表敬し奉る

52椿落　冷徹の思念や紅き落椿

〈紅椿落ちて輝く冷たさよ〉

53焔雪　雪しまき一条の陽は貫けり

54朱白　斑椿や鄙つ女の頬に雪ぞ降る

55動雪　下駄に転び掬はむものや雪新し
56月兎　命なき月に兎の跳びはねる
57興停　霊酒なり詩句釣り上ぐる盃の中
58酒盞　指二本酒盃上ぐるやおつぼ口
59興至　老詩人嚔(くさめ)の如く句を詠めり
60凡止　山頂の海の眺めや孤絶見む[16]
61金箭　男体や白根へ金の朝陽の矢
62靄金　金泥の靄のうちにぞ仏見ゆ[17]
63撒鈴　銀泥に霞むや鈴振る遍路影
64巫女　日の巫女や天の浮橋坐し給ふ[18]
65月祈　日を拝す神の賜ひし月をもて[18]
66神農　産土神(うぶすな)やけもの頭(かしら)に野良着かな
〈土が知ったる始めの神は，犬や兎の頭して，木綿甚兵衛に藁靴の百姓神でござった〉
67日蛇　日の神は湖(うみ)のこなたに昇りまし[18]　かなたに来るは八岐大蛇(やまたのおろち)
68父祖　遠つ祖(おや)息子のうちに拝すなり
69総国　皇祖聞くみ国の民の声々を　豊葦原の中国(なかつくに)にて
70涙日　涙雨(るゆう)あり（しぐるるや）早や陽光を越へ行きぬ
71瀧止　滝も止まば法皇民に聞くならむ
72刺点　物事の終始の間(かん)や詩人視る[19]　ひそかなる点何ものか刺す
73灼金　屏風絵や金に始まり金に溶け
74灰匂[20]黄金(こがね)なる永遠(とこしへ)の湯ぶねに大地出ず[42]
75景浮　観音宝前の線香を見て
灰香の境をなすや白熱点
76麗日　忘れえじ漆の光沢(つや)を愛でし日よ
77扇詩　書きつけし詩句風に載せて扇かな
78蜻蛉　群れ蜻蛉白蝶三羽霧の中
79躑躅　つつじ見ぬ人や早瀬を聞かざらむ
80杜鵑　人気なき地はこゝぞとや杜鵑(とけん)鳴く
81春秋　春来ればまた秋追ひつ四季めぐる[21]
82詩船　その積荷何(なに)の詩句やら帆掛舟
83扇面　扇面の半円視界と見たてたり　眼は三角の要(かなめ)もとなり[22]
〈扇面の視界眺むや要の眼〉
84扇語　我手の扇(せん)思ひのまゝに年暦(としごよみ)　めでたく開く十二扇骨
〈十二月(つき)開くや扇骨(おうぎ)の数〉
85扇天　天体を測る水夫や六分儀　天地繰る詩人の扇

〈六分儀繰るごとく詩人の扇〉

86秋忍　またこゝに忍び来りし秋のこと

87扇談　扇面と屏風や向ひ語り合ふ

88風幻　扇もて夢幻の国の風掬ふ

89句翼　扇面の白翼黒き文字三つ　　見へぬ羽に追へば白片々

90氷散　千々に散る玻璃かとばかり氷柱(つらら)かな

91菖蒲　葦溝に江戸の門まで菖蒲立つ　　我迎へたる鄙つ女の列[23]

92花娘　果てしなく菖蒲群れたり青また黄　　市に繰り出す鄙娘たち[23]

93渓流　水上へ急ぐ早瀬の響あり[24]

94布世　世に旧(ふ)りて破れもあらぬ布奇しき[25]

95総水　瞑目せばものみな去りぬ早瀬の音

96蔬水　命もて流る小川と語り行く

97意頬　頬に頬思ひに思ひ向き合ひぬ

98金杜　森深く黄金の光さし入りぬ　　老いし詩人の胸憂びきて

99朱叫　そよぎなき黒き木叢(こむら)に緋の咆哮

100今明　昨日とや今日とや言はむ日の境

101点時　“しっ”と音立つるや時は動き出す[41]

102死秤　死と談判その提案を秤るなり[26]

103秋透　秋澄めり裁きの神の眼にも似て

104窓靄　朝の窓火桶の国は靄に開(あ)く

105杉藤　杉に藤ギリシャ神話の園と見ゆ

〈杉と藤，ヘスペリデスの園のヘラクレスとヒドラ〉

106金足　長谷寺にて

巨柱清(すが)し黒き葉影に見えかくる　　観音にただ金色(こんじき)のみ足

107柏塔　鬱蒼たる杉の塔の根泣きいたり[27]

108蓮葉　詩句紙を転びて早し蓮の露

109句算　数へえぬ数や詩句にはあるべしと[28]

110燃痛　一(ひと)言葉あだにものせむ灼く痛み

111小詩　詩句回(めぐ)りまた生れくる小詩あり　　ただ形容詩頭文字出(い)づ

112花蜂　ぼうたんを刺すや快楽の黒き蜂

〈ぼうたんの花芯に黒き蜂遊ぶ　　類ひもあらぬ胸の針かな〉

113蜂眠　薔薇刺して蜂は花芯に愛の死や

114数匂　数ならぬ分ちもあえぬ匂なり

115血黒　墨これぞ精神の樹液思想の血

116扇風　言葉払ひ思ひ通はす扇風

117迎市　菖蒲の群皇居をめぐるを見て
　　街々に朝賀の列を花菖蒲
118不二　羽衣の天女日本の富士ならむ[29]
119冨嶽　雲海を進む聖座なり富士高し
120大死　富士高く凍れる空の雪姿　　巻物裾へ展ぐ霊山[30]
　　〈神さびて裾野展ぐる雪の富士〉
121月晨　日と月の光や色や暁月夜　　水まざりたる葡萄酒のさま
　　〈水まざる葡萄酒色や暁月夜〉[31]
122夜播　夜の種や光育む夕の月
123眠路　月下にて夢路大地をめぐりたり
124語止　語り止みて心耳に響く言葉聞け[32]
125盲語　目を閉じつ語れる人を耳に受く
126思波　さざ波や思ひに触れて水揺るる
127夜宴　とく起きよ夜宴秘かの残滓あり
128魚語　もの言はぬ魚に撒きたり無音の語
129米蕪　蕪漬の一切れ飯に味そへり
130米梅　米飯を生かす梅干粒一つ
131光焔　火と光混るや黄白斑花
132鳴琴　島日本朝陽の指に震ふ琴なり
133庭壺　茶碗にも似たるこの庭掘り給へ　　かぐはしき景飲みに来ませば
　　〈庭は茶碗かぐはしき景飲み給へ〉[33]
134焔匂　燃えつきし後かぐはしや愛と香
135蛍虫　避けむとて瓦もちたり蛍飛ぶ
136吸景　景色吸ひ息とどめつつ筆とらむ
137奉納　貝殻と錆もつ錨奉納す　　海のなだめに御礼参り
138抱月　島々は網もつ泛子か月を捕る
139角霊　運命なる笛聞かぬ術知らざりき
140歓舞　地をめぐる舞踏や響きまた音もなし[34]
141春舞　囃高なり速まりゆくや春の舞
142寿墨　墨といふ黒き汁なるめでたさよ
143墨金　それ墨は凝れる金にほかならず
144金闇　紅葉散る川面画きつ金の音を聴く
145頌歌　厳かにまた痛ましき相かな　　自然は歌ふ五七調もて[35]
146老桜　蕾花色鮮かに老桜　　魁偉なるさま肉体の樹や[36]
147古景　金屏の靄は古景を息吹きたり　　今の喜び永遠の光よ[36]

148葉々　水音や葉影や落ちて重なりぬ
149雨雪　雨は雪ぬかるみ金となりゆけり
150土椀　土碗に樹液一服飲みたりき[37]
151旅桜　祝福を老桜に乞ふ旅の果
152社鏡　僧堂の闇のうちにて何やらむ　　銀鏡突如燃え立つ焔[38]
153水滴　松の露海に入らむと怖じ震ふ[39]
154秋景　稲原の濁流早きを渡るなり
155煙都　思ひ出や京の煙の青き中
156松海　見はるかす海攻め寄せて松雫
157水々　雨や陽や松そぼ濡れて湖に映ゆ
158扇島　立つ鳥をうねりつつ呑む扇かな
159鴨羽　渇色に濁れる水や鴨の羽毛
160否鐘　わが胸の壁に震へり否の鐘[40]
161香烟　樹間の壇供儀の煙は受容と見ゆ
162使翼　こゝに使者双翼もちて来るなり
163耳眼　秘し胸に涙しめらふ言葉聞く
164秋菊　早瀬澄む彼方に黄菊群れ咲けり
165金乳　乳に似し色おだやかな金地あり
166海望　ひたすらな海の誘ひを雨滴知る
167菊靄　薔薇は地に菊は野霧に育ちたり
168金精　生の酒を知の黄金を注ぎてよ
169眼水　両眼開くや涙露二滴
170水霊　神つとに胸深き涙見給へり
171神鏡　宮の奥開きて鏡の雫かな
172別離　日本より我を別たむものやある　　金の砂塵を撒きてなすべし

百扇帖はクローデルが，1923年11月から，中１年の休暇を除いて，1927年２月まで大使在任中の日本との接触を動機として生れた。それは日記に散見する関係のメモによって明らかである。しかし，日本の自然，神話，風物を題材にしながら，その後に，又はむしろ中心に「詩法」のテーマが生きている。これは1898年の日本旅行の際,「詩法」を生んだという日光体験の重要性，クローデルと日本との関わりがそこに始って如何に大きく深いものであったかを，この172の短詩が証明しているようである。

初版は1927年東京，三冊の縦長の折本，表紙は金箔繧繝，紺布の帙入。中は「東洋の墨と筆の材質に憧れた」彼自身の毛筆書き，文字の形，散らし書の配置など，色紙短冊の草書を模しながら，詩の内容をそこに反映させている。「絵画と文字の親近性」に着目してい

た彼の一つの実験であろう。二頁続きで上下三段に分けて各段に一詩句。各冒頭にその詩句に因んだ草書体漢字二字，選択は山内義雄，吉江喬松氏により，筆は有島生馬氏。

尚，遡ってこれら詩句の中から選ばれた20が，富田渓仙画伯の水墨画とクローデルの毛筆とで扇面を飾り，いわば俳画を模した「四風帖」となって，それが百扇帖を生む動機となったという。1942年，N．R．Fから初版に模して石板刷で出版，序文を加え，東洋の書き物道具，墨，毛筆，紙（扇や壺）及び，表意文字の形，余白を尊ぶ文字の配置への関心を示し，それら思想の表現になくてはならない道具と書き手である思想の画家との関わりを述べている。「…われわれの内面の暗さながらの黒き墨。硯に僅か水を滴らして磨る。そして墨池は魔法の汁なる墨汁を集める。思想の画家はもはや，われらの指を通って，われらの内奥に燃え広がる詩と一つになった風のように軽いあの筆を，その汁に滲しさえすればよい。自在に画かれた線…そこにはサンタックスの甲冑から解放され，ただ同時性によってのみ余白を越えて一つとなった数語からなる句がある…何の上に書かれるのか…壺の上…扇面の上にか…手から伝わる呼吸が急いで発するあの沈黙の言葉を，汝心耳に受け止めよ…各々の記号群，或いは単位が割り当てられた場に，他の群との関係に都合のよい巧みな位置を自由に得るように。一行ではなくて二次元の間で，自由に楽めるようにしよう。ただ思想丈が曲折の衝撃によって，言葉の継続の要素を強めるのだから，何故脳の知性の暗き凝塊の溶解を，算定された間隔によって，必要な丈遅らせ，知性が発する呼びかけの執拗さを引き延ばさないことがあろうか」。

以上明らかなように，百扇帖は単なる詩集ではない。毛筆が画き出す象形文字，そして水墨画，それらを受けとる紙や陶器，正に「自然の模倣」である美術と混然一体となった詩句の余韻を，たとえ印刷文字となっても伝えるものでなくてはならない。つまり日本でなら，それには俳句が勿も応わしい。そして序文にもある通り，これらの詩句は「且つて日本で，その影を求めて憶面もなく，俳諧の作法に交わることを試みた」ものである。

それでは，彼の俳諧の知識はどんなもので，又どこに俳諧の影響が見られるだろうか？(1)1925年休暇中スペインでの講演「日本文学散歩」の中で，日本の短詩について次のように述べている。フランスの詩がイデー，イメージ，情緒の奔流であるのに対して「紙の上に書かれ，描かれる最も大切な部分は，常に余白のまゝなのです。鳥も，木の枝も，魚も，想像を満たす空白を語り，その場所を示すためにのみ役立つのです」と水墨画の余白の説明から始めている。つまり「余白の文学」なのだ。マラルメの「余白」の空無に始まり，自らの詩の「余白」の空無，そして道教との出会いによって更に広がった「空無」の思想が，世界でも最も短い詩，俳諧のもつ「余白の空無性」に魅かれないわけにはゆかなかった。

「大きな水輪を広げようとして，静かな水面に触れること，情感の種子，音楽家が少しづつ心や思ひに惨みわたらせるために，指でただ一つの音を震動させる絃」それが短歌であり，更に短くしたものが俳諧だと言っている。句の例として，芭蕉，宗鑑，守武，貞徳，貞室，宗因の仏訳があげられ，よい俳諧は「中心のイメージと，精神へのその反響から成

り，表現され，又は言外の意味をもった魂の，そして心の暈影がそのイメージをとり囲む」と言っている。そして「文法的にも，思想的にも，俳諧と同様に圧縮された簡潔さをもつ」俳文にも注目している。「日本の芸術は小装飾品(但能は偉大)で……高貴で美しいが力と偉大さに縁遠い」。しかしものの偉大さは「物質的次元によるのではなく」そのものの「本質を緊張の次元のもとに失わない」という「奇蹟」をなしとげていると彼が言うのは，盆栽においてのみではなく，俳諧にも当てはめることができるに違いない。

(2)以上のような理解がもつ巾について考えてみる。彼が読んだ俳諧に関するものには，先づ，座右の書であったmichel RevonのAnthologie de la littérature japonaiseがあり，Chamberlaim は読んでいるので，そのBachô and the japanease Poetical Epigram があろう。又CouchoudのLes Epigrames Lyliques du JaponそしてN.R.F.(HAI-KAIS) (1920，Sep.) を知っていたのは間違いないと想像される。日本では高浜虚子に会ったと言われるが，日記には記されていない。又前述の講演の中で，「日本は今俳諧が隆盛」だと言い，東京の最も有名な女流俳人の句をあげている。長谷川かな女かと思われるが，当時の俳人との交流，或いは明治以後の俳句について，どの程度情報を得ていたかは分らない。つまり前述の仏英語の俳諧紹介は，明治以前の俳諧であり，特に彼が引用している句は，芭蕉二句を除いて，すべて談林風かむしろそれ以前の古風の俳諧である。

(3)20世紀始めに来日し，俳句に関心を寄せてその紹介をしたクシューが，10人程と共にHAIKAI Francaisを始めたのが、1920年頃であれば，クローデルの日本大使着任当時すでにその運動は進行していた。彼らが学んだハイカイも，クローデル同様明治以前の俳諧の仏語訳された三行詩のものからである。クローデルはこうした運動をどう見ていただろうか？クシューが老荘に反する儒教を高くかっていたことなどからみても，「空無」の芸術として俳諧を捉えていたクローデルには，皮相な俳諧への接近としか思へなかったのでないだろうか？

(4)百扇帖は明らかに，フランスのシュールレアリズムに影響を与えたハイカイとは異る次元にあるが，彼も又俳諧を模ねている。A切れ字の断絶性を重視し，文頭の，時には中程の一語，又数語を全体から分けて配置している。又全体の構文と関係なくテーマとなるような一語を始めに置いている。8 Otzukisama 19 Rougeur など。いわば「古池や」に相当するものと思われる。Bとり合わせ，4藤と柏，8月と蛙，56月と兎など。C見立て，3藤蔓を蛇と，91菖蒲を田舎乙女と，138月を泛子となど。D景物 日本古来の月雪松郭公など。E瞬時性，70, 90, 169など。F諧謔性8，48，など。G擬人法，1，8，23など。H本歌取りやパロディとまでは言わないまでも，強い影響や関係を思わせるものがある。100と古今集冒頭の「年の内に…昨年とや言はむ今年とや言はむ」。122と「みな人の昼寝の種や秋の月」(貞徳)。50と「粽結ふかた手をはさむ額髪」(芭蕉)。4と「棧や命をからむつたかづら」(芭蕉)。8と「古池や蛙とび込む水の音」(芭蕉)。148と「落葉落ち重なりて水水を打つ」(暁台)。又48は漱石の「猫」と擬人法，諧謔性において関係を思わせられる。I短詩型ではあるが，長短様々で一定しない。J構文上の省略，動詞のないもの，142，141，41など。

ほゞ以上のような関係はあっても，その韻律はあくまでも彼自身の「詩法」による，呼吸に基く内在的な自由律である。そしてその思想と感覚は言うまでもなくクローデル固有のものである。それを敢えて日本語の俳句の韻律に置き換えることに意味があるだろうか？俳諧を模倣し，日本の自然風物を題材とし，日本の環境の中で歌われたことを思うと，彼の言う「霧と靄」の湿潤性の風土の中で育った日本の五七調がもつ底深い呪術的魅力をそれに添えることは，拒まれないことのように思われた。そこで当然原詩のイメージを中心に俳句の省略法が必要となったし，17字に入らないものは，付句の形を取ったが，勿論付合の働きや味が出るようなものではない。

クローデルにとって当時「超自然が自然以外の何ものでもない」日本,「礼拝のためにすでに備えられ，と丶のえられていた」日本の風土中で，彼の「内面的同一性との接触」に打ち震え，Co-naissance 認識＝共生しつ丶歌われた百扇帖，それが,「乾坤の変は風雅のたね也」[42]として造化の自然に帰ることを説いた芭蕉の心とどこかで結ばれていることが，この拙い俳句訳で幾らかでも見出されればと願わずにはいられない。

クローデルは空無を介して日本の芸術を理解した。しかも彼の空無の思想は老荘にとどまるものではなく，十字架の聖ヨハネに代表される「被造物としての空無」であった。と同時に,「西行の和歌における，宗祇の連歌における，雪舟の絵における，利休が茶における，其貫道する物は一なり」[43]と一筋の風雅に生き，その「神の息吹き」[44]の風のま丶に旅した芭蕉を代表とする中世「空無」の精神において，クローデルは日本というローカルの世界がカトリシズムと一致したその永遠の展望を見つづけているのではないかと思う。

注

(1) 18の長谷牡丹の他牡丹に関する16句の殆どは長谷寺での印象によるものと思われる。

(2) 牡丹の白，又香については2，15，18，21，22，23，25，26，30。「雪裏の梅華は一現の曇華なり」(道元)「白一色の世界が一枝の梅によって白たることを表現自覚する。一つの色，一つの香をもつことによって白は初めて白たることを現出する。空が色，色が空という抽象は雪漫々と梅花一枝によって具現している」(唐木順三・日本人の心の歴史p. 186)。「白牡丹といふといへども紅ほのか」(高浜虚子)。

(3) 日光中禅寺湖付近の地蔵，他6句。

(4) 彼の散歩用ステッキには特別の意味がある。La canne (Pro., p. 1189)。傍線は訳者の推測。

(5) 絹雲は原文では絹のハンカチ。

(6) ミサ中キリストの血に聖変化する葡萄酒。

(7) Ar Poétique (Po., p. 154, 167)「太陽への義務として赤をしるす」「色彩は太陽

の衝撃による物象への点火」

(8) 赤―キリストの血―完全な色

(9) 「薔薇色の珊瑚の橋を通って天に上る」(Journal I, p. 584) 京都。

(10) 日光湯本。

(11) 宮中宴会での舞楽 (J. I, p. 545)

(12) 「眼は章の最後に到っても，最初の語は消えず…過去は実在を止めぬ」(A. P. p. 140)

(13) 日光湯本。L'arche d'or dans la foret (Po., 81)

(14) J. I p. 608

(15) Dans le Loir-et-cher (Pro., p. 713)

(16) le Risque de la mer (Po., p. 99)

(17) 1898年，西本願寺，1922年2月大徳寺，以来金（銀）泥の露による絵画手法に心酔。

(18) 日は天照，月は素戔。La Délivarance d' Amaterasu (Po., p. 109)

(19) α にしてΩ なるキリスト「始めと終りを同時に与えられた」(Les aventures de Sophie)

(20) 74と75の漢字が入れ代っているらしい。

(21) 「自然界の繰返しは…固有の価値，不可欠な意義，典型的で秘蹟的な意味，真正性があること」(A. P., p. 133)

(22) 「手は壁の影を，三角形の一角は…他の二角を知る…存在するすべては自分がそれなしに存在できなかったものを示す」(A. P., p. 150)

(23) 中禅寺。

(24) 「流れは水上へ上らず海へ下る」(J. I, p. 614)

(25) 「我々は無からなる，存在と無の不確かな連続で織りなされた我々の生命の布そのもの」(J. I, p. 594) 25他方能衣裳の布などを眼にしたのではないか。

(26) J. I, p. 732

(27) 奈良。innacessibleをsombreとみる。(J. I, p. 630)

(28) 「何かが私の中で数を数え，一を加え，…決定的な数を成就する」(A. P, Po. p. 142)

(29) 能“羽衣”と富士の山。(J. I, p. 575, p. 734)

(30) オリンポスの神山にかけて。

(31) ミサの葡萄酒＝キリストに水＝信者をまぜる。

(32) 「言葉が止み，それを吸い込まねばならぬ。み言は止み，聖霊はきたる」(J. I p. 632)

(33) 盆栽。

(34) 能の足拍子にかけて。(J. I, p. 573)

(35) 「日光の森のテキストが語る宇宙の新たな詩法」(A. P., Po., p. 143) 彼はalexandrinに反対であるので，日本の五七調ととった。

(36) 大覚寺古画。(J. I, p. 583) 見たのは紅梅図。

(37) 三井家茶会。(J. I, p. 588)

(38) 奈良観音寺。僧仏具を浄める火を焚く。(J. I, p. 585)

(39) la goutteは無化への表現としてクローデルが繰返す言葉。百扇帖では156, 163, 166, 169, 170, 171にある。「震動は形相の囚われとなった運動」(A. P., Po., p.149)

(40) 「この世の虚栄のすべて，愛のすべてに，non, non, non と言う寺の鐘」(Photographies d'Hélène Hoppenot. Pro., p. 398)

(41) 「全宇宙は時間を示す時間以外のものではない」(A. P., Po., p. 136)

(42) 光と火を表わす金白赤黄は，世界創造の始めに，闇と黒の中から顕われた。創世記の創造についての考察。(J. I, p. 557) 「色彩は…焔の先ぶれ」(A. P. po. p. 167)

(43) 三冊子。

(44) 笈の小文。

(45) 唐木順三前掲書。(p. 262)

百扇帖追加

7 〈陽と雨と杖もて重ね織りなさむ〉
8 〈天に跳ぶ蛙(かわず)を笑ふ月に雲〉
18 〈長谷牡丹白さに秘めし紅ほのか〉
46 〈母若し背の子に見せむ凧上げて〉
67 〈日のみ神かなたに八岐大蛇かな〉
69 〈葦原の口や皇祖(すめろぎ)は民に聞く〉
72 〈詩人の眼終始の間の秘点刺す〉
89 〈白片と砕けて扇文字も消へぬ〉
91 〈江戸御門にて・我迎ふ堀の菖蒲は鄙つ女の列〉
92 〈市へ行く田舎女の群か花菖蒲〉
98 〈深林に陽差すは詩人老いの境〉
106 〈巨柱淨暗觀音ただ金色のみ足〉
111 〈詩句めぐりまたも小詩の生れ出ず〉
137 〈奉納の錨に見たり錆と貝〉
145 〈厳粛に自然歌ひぬ五七調〉
146 〈老桜花あでやかに肉体の樹〉
147 〈金屏の古景に永遠の光あり〉
152 〈僧堂の闇に銀鏡燃え立ちぬ〉
172 〈日本との禽別や金の砂撒かば〉

(F. 30)